

て考えられる。

大磯丘陵の地理学的考察

森 栄 子

大磯丘陵は神奈川県南部の海岸に位置し、その背後（西部と北部）に山地を控えて冬の季節風をさえぎるので、この地域の気候は、夏には海風の影響を受けて温和な太平洋岸式気候を示しているが、やや降水量が少ない。

土壌は11の土壌統に分類されるが、いずれもⅠ～Ⅲ等級のうちのⅡ等級が殆んどで、少しのⅢ等級も含んでいる若干の制限因子のある土壌である。

丘陵内の人口は、昭和45年10月1日現在、67,898人、人口密度1,003人で、県平均人口密度2,295人よりもかなり低く、中井町では305人しか示していない。全体としては農業が主として営まれ、工業・商業などにはあまり見るべきものがない。

このような丘陵地でも、地域的にみると、海岸に面し東海道本線・新幹線、国道1号線など主要な交通路に沿っている二宮町、大磯町は「都市的性格」を示し、工業・商業も少しは目立ち、第一次産業従事者は各々11.5、13.1%（昭和40年）と低く、農業人口も昭和25年頃から減少しはじめ、現在までもその傾向を保ちつづけている。この都市的性格をもつ2町の農家構成をみると、経営規模別では0.5ha以下と2ha以上が多く、専・兼業別では第2種兼業と専業が多く、販売規模別では販売なしと100万円以上が多いという様に、両極が大きい事が特徴である。

他の内陸部にある中井町・大井町・橋町では、第1次産業従事者率は各々51.4%、35.0%、30.0%（昭40）と全国平均より多い値を示し、「農村的性格」をもっている。その推移をみると、昭和20年代の疎開による人口増大をした他は、人口の増大はみられず、昭和40年まで何回かの減少を示した。その中で3町の農業人口の減少は、昭和35年頃からの高度成長時代から激化し、その割合を昭和40～45年では前述の2町よりも強めながら現在に至っている。この「農村的性格」をもつ3町の構成は、経営規模別では0.7～2.0ha；第1種兼業農家、専業農家；販売規模別では30万円以上というように、前2町と対称的であり、農家の中間層が多いことが特徴である。この中で特に注目すべきは昭和40～45年にかけて、第2種兼業農家の増大が「都市的性格」の町よりも「農村的性格」の町の方が著しいということである。神奈川県下で最高の農家率を示し、最も純農村的性格をもつ中井町で、この第2種兼業が他よりも大きい伸び率を示していることは神奈川県下の農業、ひいては日本の農業が大きく変わろうとしているからではないだろうか。しか

し一方、昭和45.5.7に行われた新都市計画法による市街化区域の線引き及び県の第3次総合計画では、中井町、大井町等は丘陵全体に「農村的性格」の役割を与えていることから、これからのような変化をしていくのであろうか。

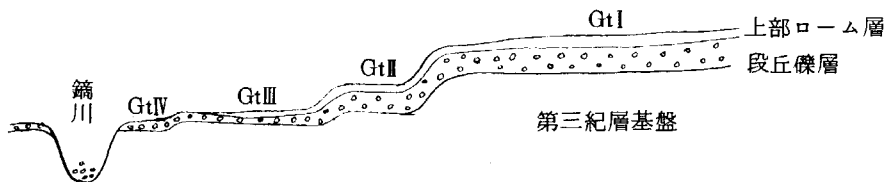
鐮川中下流域の地理学的考察

森 純 子

本論文は、群馬県鐮川中下流域をフィールドとして、地域の地形、土壌及びこれらに対応関係について考察し、さらにそれらの自然環境を基盤として成立する土地利用の変遷及び現況について論述することを目的とした。

1. 本地域の段丘面は、GtI, GtII, GtIII, GtIVの四段に分類される。いずれも第三紀層基盤の上に、GtI・GtIIでは10~15m, GtIII・GtIVでは1~3mの段丘礫層を不整合に載せている。

2. ロームを被覆する面は、従来GtI・GtIIのみと考えられてきたが、筆者はGtIIIにもロームを載せる部分があることを確認した。従ってGtIVはpost-loam面に、GtIIIは立川面に對比されるのが妥当と考えられ、その結果、GtIIは武蔵野面に、GtIは下末吉面に相当すると思われる。



鐮川河岸段丘の模式的横断面図

3. 先に東木氏(1929)は、鐮川支流の反Y字現象から、土地の西方へ向かう傾斜運動を推定したが、鐮川及び河岸段丘の縦断面形からは、東方への傾斜運動が推定された。従って鐮川流域の全体的な地盤運動の方向は、段丘の非対称的配置から推定される北方への傾斜運動とあわせ考えると、北ないし北東であると推定される。

4. 本地域には、火山灰を母材とする火山灰土壌、段丘物質を母材とする沖積土壌、崩積物質を母材とする崩積土壌の3つの母材型の土壌が発達する。またこれらは別に地下水の浅い地域には、グライ化作用の結果グライ性土壌が発達する。